J. A. シモンズ『自伝』における欲望、教養、言語

野末　紀之

1. J. A. Symonds, *Memoirs* における語りの二重性

シモンズの『自伝』は、執筆から完全版の出版まで一世紀以上が経過している。1889 年に着手され、年内にひとまず完成、1893 年の著者の死後、遺産管財人の H. B. Brown による編集版が 2 年後に出版された。同性愛にかかわる記述はすべて削除修正されていた。そのほぼ百年後の 1984 年、Phyllis Grosskurth による編集版が出た。グロスカースはシモンズの同性愛にかかわる箇所を中心に編集し、あまり関係ないと判断した約三分の一を削除した。無削除版出版は 2016 年、Amber K. Regis 編集による Palgrave Macmillan 版である（引用はこの版による）。シモンズは、序文で「出版する気はないし、出版されることもたぶんない」（*Memoirs*, 59）と語る。グロスカース版の出版までは、そうした意向への配慮と同性愛をめぐるイギリス社会の制約があった。

本作のかなりあとになって語られる意図は以下のとおりである。すなわち、社会から「病的で堕落した」と見なされる情熱――しかし自分にとっては「自然で健全な」同性愛――にとりつかれた男でも、精力的でねばり強い文学的活動ができることを示し、それにより同様の「症例」にたいしいっそう科学的な取扱いが可能となることである（*Memoirs*, 361-2）。罪人意識と「自然で健全な」自己像とに引き裂かれたシモンズの苦悩は全篇にわたっており、末尾は自殺か錯乱かの暗示で終わる（*Memoirs*, 524）。そして、その苦悩に対応するかのように、シモンズの語りには率直さと曖昧さの二重性が見られる。これは、グロスカース (28) やリージス (10) の指摘するところである。本講演では、それに賛同しつつ、同性愛の欲望をあらわすさい、教養人シモンズの言語がどのような様相を呈するかをもう少し仔細に考察してみたい。

2. 文学と人生

シモンズがみずからの欲望を発見し確信するにいたる契機となるのは、生身の男たちだけでなく文学作品、とりわけ詩であった。十歳まえのシモンズに大きな影響をあたえたのは Shakespeare の *Venus and Adonis* である。彼はアドニスに同一化するとともにヴィーナスに一体化してアドニスを欲望する（*Memoirs*, 101）。ほかにも *Iliad* や William Johnson Cory の *Ionica*、プラトンの諸作との出会いが語られるが、有名なのは、W. Whitman の *Leaves of Grass*、その“Calamus”から受けた衝撃である。シモンズは、この詩人の「同志愛」を吸収し、「たくましく健康的な（労働者の）男たちと切り離せない自制や清潔、貞節」を詩群に見いだす（*Memoirs*, 368）。

一方でシモンズは、恋する男への情熱がつのったり、実らなかったり、あるいはどんな理由であれ、しばしば詩をつくる。シモンズのセクシュアリティと詩の鑑賞および創作は大きくかかわっており、それは教養人としてふさわしいあり方と言えるだろう。ところが、シモンズはそうした自己を否定し、文学や芸術、文化教養よりも人生の方がはるかに価値をもつという自嘲的言葉を吐いている。

> Life was what I always wanted; and of life I never had enough. Literature might go to the dogs, for me. . . . (*Memoirs*, 256)
> The underlying preoccupation of my life has been a tyrannous emotion. . . . Literature takes the second place. . . . (*Memoirs*, 446-47)
> I am nothing if not cultivated; or, at least, the world only expects culture from me. But, in my heart of hearts, I do not believe in culture except as an adjunct to life. ‘Life is more than literature,’ I say. (*Memoirs*, 491)

第一の引用では文学にたいする呪詛の言葉が、第三では教養人たる自己を突き放す道化た響きが聞こえる。後者は、ロンドンでの講演を行なったときの描写の一部である。次の項目では、第二の引用の内容にかかわる箇所、すなわちシモンズが不意の衝動にかられ動揺する場面と、第三の引用にかかわる箇所、つまり男娼相手に「同志愛」を抱く場面の描写を取上げ、そこでの言語と表象のあり方について検討する。

3. 「狼」の言語化、「同志愛」の空洞化

1865 年、夜のロンドン、シモンズは兵舎の近くを歩いていると、たくましい男に声をかけられる。同衾の誘いを受けるのだが、最終的に拒絶する。そのときの感情は「後悔と安堵」であったが、あとに残った「切望」は「ひとつは同志愛へのあらたな欲求、ひとつは経験したことのない動物的欲望」とされ、後者は‘the wolf’と

言い換えられている（*Memoirs*, 366）。この語はここではじめて用いられる。このエピソードから 5 ヶ月後、「狼」がシモンズを急襲する。

> [My] eyes were caught by a rude *graffito** scrawled with slate pencil upon slate. It was of so concentrated, so stimulative, so penetrative a character—so thoroughly the voice of vice and passion in the proletariat—that it pierced the very marrow of my soul. . . . Now the wolf leapt out. . . . The vague and morbid craving of my previous years defined itself as a precise hunger after sensual pleasure. . . . I know that that obscene *graffito* was the sign and symbol of a paramount and permanent craving of my physical and psychical nature. (*Memoirs*, 366-67)
> *graffito*: '"Prick to prick, so sweet"; with an emphatic diagram of phallic meeting, glued together, gushing' (*Memoirs*, 374; n35. Symonds' marginal note.)

「狼」を出現させたのは生身の男でも詩でもなく「卑猥な落書き」という都市文化の一面である。無意識の不安や逸脱した欲望を「狼」に見立てるのはフォークロアではなじみ深い（Kemp 51）。Butler によれば、注の "emphatic . . . phallic"と"glued . . . gushing"、本文の"voice of vice," "passion in the proletariat," "sign and symbol of a paramount and permanent"などの音の戯れや頭韻は「コックニーの性質」に符号し、「言語を超えた口唇的快楽」を示唆している（Butler 248-89）。ケンプはこの落書きに肛門性交への嫌悪があると同性愛者の立場から批判している（Kemp, 60）。ただ、本文には"so penetrative. . . that it pierced . . ."と逆の志向を示唆する表現もあって、微妙である。つづく一節はシモンズの罪悪感を反映しているが、ゴシック小説との類縁性をうかがわせる。

> God help me! I cried. I felt humiliated, frightened, gripped in the clutch of doom. Nothing remained but to parry, palliate, procrastinate. . . . And all the while the demon ravished my imagination with the 'love of the impossible.' Hallucinations of the senses crowded in upon my brain together with the pangs of shame and the prevision of inevitable woes. . . . [M]y life had to fly on a broken wing. . . . (*Memoirs*, 367)

類縁性の検証については今後の課題としたい。シモンズの言語は、血肉化された古典的教養の領域から離れ、ポピュラー・カルチャー（グラフィッティ、ゴシック小説）やフォークロアに接触し、労働者の発話リズムの再現を図る。そのようにして、跳梁する「狼」とその衝撃を明示しようと試みていると言えようか。

1877 年、ロンドンでの講演期間中のエピソードも注目に値する（*Memoirs*, 489-91）。彼は男娼として働く兵士を買うことで「同志愛」をなかば満たし、なかば不満をおぼえたと述べる。ここでの特徴のひとつは、男の発話に具体性が欠けており（直接・間接話法の不在）存在感が希薄であること、もうひとつは、娼家で「同志愛」を結ぶことのできる可能性についての評価の目まぐるしい変転である。後者は書き手の混乱を示すのか、混乱をそのままに書きあらわしておこうとする著者の意図なのか、容易に判断できない。ここには他者の不在と空転する自閉的思考と同時に、「同志愛」という語の空洞化もまた示唆されているように思われる。

そのあとの箇所でシモンズは、ロンバルディアのあちこちで男女の娼婦を買い、彼らと「同志愛」を結ぼうとしたと述べる（*Memoirs*, 491）。娼婦？娼婦たちとの「同志愛」？ホイットマン由来のこの鍵概念がここまで拡大して用いられると、先の場合と同じく意味の空洞化が生じる。あえて好意的な見方をすれば、シモンズは無意識のうちにその言葉の廃棄を志向し、あらたな表現を模索しているのかもしれない。

参考文献

Butler, Shane. *The Passions of John Addington Symonds*. Oxford University Press, 2022.

Grosskurth, Phyllis. "Introduction." *The Memoirs of John Addington Symonds*. Edited and introduced by Phyllis Grosskurth, University of Chicago Press, 1984, pp. 13-28.

Kemp, Jonathan. "A Problem in Gay Heroics: Symonds and *l'Amour de l'impossible*." *John Addington Symonds: Culture and the Demon Desire*. Edited by John Pemble, Macmillan, 2000, pp. 46-61.

Regis, Amber K. "Introduction." *The Memoirs of John Addington Symonds: A Critical Edition*. Edited and introduced by Amber K. Regis, Palgrave Macmillan, 2016, pp. 1-56.

Symonds, John Addington. *The Memoirs of John Addington Symonds*. Edited and introduced by Phyllis Grosskurth, University of Chicago Press, 1984.

----------. *The Memoirs of John Addington Symonds: A Critical Edition*. Edited and introduced by Amber K. Regis, Palgrave Macmillan, 2016.